

# 佐伯史談

第六十号

郷土史研究誌  
通算第八十二号

昭和四十五年一月廿八日

## 佐伯史談会

事務所 佐伯市大字 福垣宮龍藏寺刊柴方

随想

### 佐伯史談会の課題

— 昭和四十五年の年頭に当りて —

佐伯史談会  
副会長 羽 柴 弘

ここに昭和庚戌の歳旦に当り、謹んで顧問五先生及び、客員、会友、並びに会員三百有余の方々の御健康を祈り、今年以更に旧年に倍する御指導を賜わりますよう。そして会員は相携えて故里佐伯の歴史や文化の調査研究に励みたく、どうかよろしくとお願い申したい。

千九百七十年という今年に、故里佐伯は私共にとり、大変課題ともならずで済もうか。変動はなほ大きい当地方へいよいよ女面、私共佐伯史談会にはどのような役割が与えられようか。これまで十余年積り重ねて来た私共の研究を、どういう方向に進展さすべきであるか。私共が私共思いをめぐらしている。

昨年、一昨年の明治百年の後をうけて、引続いて明治、大正、昭和百年の歴史に思いをはせるのであつたが、強く感じたことは、意外に郷土の現代史が開却されていくことである。大事業が未だに忘れられるべき

て貴重な資料が姿を消してつある。明治以来の重要な郷土の出来ごとを記録、正確な御土史の編纂がなされていくのである。明治から大正、昭和とすばらしい展開をみせて日本の政治や経済、産業や交通、その他いろいろの方面で見せている。郷土の歴史的な変遷展開の記録が殆んどない。(左左) 郷土の教育の歴史を正確にするためとて「離離新郷土教育史要覽」(離離新郷土教育史要覽)がある位かともである。

我々の郷土も、太平洋戦争という技術的敗戦にまで導かれ左悲夢の十余年、終戦後の混乱、それら若悩の中からは、立ち直つて僅かに十数年である。ところが今再び驚くべき、経済生活による消費生活の向上となり、止まるところを知らない程進展をへつけがかる今日である。

本号の内容	
随想 佐伯史談会の課題 (羽柴弘)	1
研究 毛利氏と本宗について (佐藤茂)	3
研究 佐伯藩の藩政 (山本武雄)	6
主編 三入九の思ひ出 (中島フサ)	9
研究 郷土の先覚者たち (山本保)	10
研究 佐伯藩の文化 (佐藤茂)	15
研究 佐伯藩の山本氏 (高橋智)	19
研究 初詣の歴史 (佐藤茂)	22
研究 佐伯藩の山本氏 (高橋智)	23
研究 佐伯藩の山本氏 (高橋智)	24
研究 佐伯藩の山本氏 (高橋智)	25
研究 佐伯藩の山本氏 (高橋智)	26
研究 佐伯藩の山本氏 (高橋智)	27
研究 佐伯藩の山本氏 (高橋智)	28
研究 佐伯藩の山本氏 (高橋智)	29
研究 佐伯藩の山本氏 (高橋智)	30
研究 佐伯藩の山本氏 (高橋智)	31
研究 佐伯藩の山本氏 (高橋智)	32
研究 佐伯藩の山本氏 (高橋智)	33
研究 佐伯藩の山本氏 (高橋智)	34
研究 佐伯藩の山本氏 (高橋智)	35
研究 佐伯藩の山本氏 (高橋智)	36
研究 佐伯藩の山本氏 (高橋智)	37
研究 佐伯藩の山本氏 (高橋智)	38
研究 佐伯藩の山本氏 (高橋智)	39
研究 佐伯藩の山本氏 (高橋智)	40
研究 佐伯藩の山本氏 (高橋智)	41
研究 佐伯藩の山本氏 (高橋智)	42
研究 佐伯藩の山本氏 (高橋智)	43
研究 佐伯藩の山本氏 (高橋智)	44
研究 佐伯藩の山本氏 (高橋智)	45
研究 佐伯藩の山本氏 (高橋智)	46
研究 佐伯藩の山本氏 (高橋智)	47
研究 佐伯藩の山本氏 (高橋智)	48
研究 佐伯藩の山本氏 (高橋智)	49
研究 佐伯藩の山本氏 (高橋智)	50
研究 佐伯藩の山本氏 (高橋智)	51
研究 佐伯藩の山本氏 (高橋智)	52
研究 佐伯藩の山本氏 (高橋智)	53
研究 佐伯藩の山本氏 (高橋智)	54
研究 佐伯藩の山本氏 (高橋智)	55
研究 佐伯藩の山本氏 (高橋智)	56
研究 佐伯藩の山本氏 (高橋智)	57
研究 佐伯藩の山本氏 (高橋智)	58
研究 佐伯藩の山本氏 (高橋智)	59
研究 佐伯藩の山本氏 (高橋智)	60
研究 佐伯藩の山本氏 (高橋智)	61
研究 佐伯藩の山本氏 (高橋智)	62
研究 佐伯藩の山本氏 (高橋智)	63
研究 佐伯藩の山本氏 (高橋智)	64
研究 佐伯藩の山本氏 (高橋智)	65
研究 佐伯藩の山本氏 (高橋智)	66
研究 佐伯藩の山本氏 (高橋智)	67
研究 佐伯藩の山本氏 (高橋智)	68
研究 佐伯藩の山本氏 (高橋智)	69
研究 佐伯藩の山本氏 (高橋智)	70
研究 佐伯藩の山本氏 (高橋智)	71
研究 佐伯藩の山本氏 (高橋智)	72
研究 佐伯藩の山本氏 (高橋智)	73
研究 佐伯藩の山本氏 (高橋智)	74
研究 佐伯藩の山本氏 (高橋智)	75
研究 佐伯藩の山本氏 (高橋智)	76
研究 佐伯藩の山本氏 (高橋智)	77
研究 佐伯藩の山本氏 (高橋智)	78
研究 佐伯藩の山本氏 (高橋智)	79
研究 佐伯藩の山本氏 (高橋智)	80
研究 佐伯藩の山本氏 (高橋智)	81
研究 佐伯藩の山本氏 (高橋智)	82
研究 佐伯藩の山本氏 (高橋智)	83
研究 佐伯藩の山本氏 (高橋智)	84
研究 佐伯藩の山本氏 (高橋智)	85
研究 佐伯藩の山本氏 (高橋智)	86
研究 佐伯藩の山本氏 (高橋智)	87
研究 佐伯藩の山本氏 (高橋智)	88
研究 佐伯藩の山本氏 (高橋智)	89
研究 佐伯藩の山本氏 (高橋智)	90
研究 佐伯藩の山本氏 (高橋智)	91
研究 佐伯藩の山本氏 (高橋智)	92
研究 佐伯藩の山本氏 (高橋智)	93
研究 佐伯藩の山本氏 (高橋智)	94
研究 佐伯藩の山本氏 (高橋智)	95
研究 佐伯藩の山本氏 (高橋智)	96
研究 佐伯藩の山本氏 (高橋智)	97
研究 佐伯藩の山本氏 (高橋智)	98
研究 佐伯藩の山本氏 (高橋智)	99
研究 佐伯藩の山本氏 (高橋智)	100

この國を挙げての改軌の中で、私共はどんな心算で御土の愛護する現実をうけとめていつたらよいのであらうか。御土史の研究という地道な仕事は、ともすると今日の社会情勢と全く関係ない、次元の違つた全然別な世界のような気がすることがある。勿論そんなものでない。佐伯史談会の文化活動は、これらとどう取り組んで行くべきであらうか。じっくりと考えて見たい。

先ず第一に、私共は今日の社会変遷の姿をじつくりと受けとめ、これを介折してその根元をさぐり、過去に鑑みてこれから帰趨を推しはかりたい。迎合でも奮伸ぶでもハッパリでもない、真面目な態度で取り組もうではないか。

第二に心かけたいことは、單なる懐古趣味や、偏狹な御土愛へひいきのひきたおしに隨つてことを警戒したい。やはり素人ながら正統な歴史学や民俗学の基礎に立ち、又芸術や文化についての理解教養を深めたい。つまり私共史談会員は、御土史に關連する学術についての教養を何とでもしてつづつて進めて行かねばならない。いつまでも「大友興廢記」のような實記物語に依憑していつてはならない。

第三には研究成果の積み上げとその効果的交付を出してある。私共史談会のこれまで到達しているところから、或いは佐藤鶴谷翁や増村隆也氏の示されているところと足場にして、その先は今年の研究と積み上げたい。十歩も百歩も今年は前進しなくてはならない。発表機関としては勿論この「佐伯史談」があるが、新聞よし、雜誌よし、講話よし、単行本の発行は更によし、そのような道はもう充分開かれてゐる。資料を土つてはかればその機会は今年は更に多く与えられると思う。そしてそれらの資料のとりまとめは豊富にあつて、検討を充分にたえ

かた内容の豊富さとし、すじの通つた発表に持ちこた、少くとも原稿紙十数枚以上の、重量感あるものでありたい。

そして次に考えたいことはそれらの地域社会への反映である。最近になつて佐伯史談会の実績は、ようやく心算する人達からかなり高く評価されている様に思われる節がある。私共は臆することなく私共の周辺社会に目をそそぎ、地域の人々の声をきき声に耳を傾けるようにし、もし機会さえあれば遠慮なくその求めにも応じて、出来るだけの協力奉仕をしようではないか。かく残っている古文書の發見、埋もれてゐる史蹟の發掘、さては古びゆく文化財、衰退の一路を辿つてゐる民俗資料などの保護は、地域社会との関連を抜きにしては考えられない。

更に今年、心にとめて忘れたいことは御年配の方々の尊重である。「明治は遠くなりにはけり」の、いおは日本の上げ潮の時代に生まれ、大正、昭和と三代にお友つて生き抜かれてゐられるお年寄の方々は、貴重に見聞体験を持つて居られる、愛を言ひ方で失礼であるがそのまゝ貴重を歴史資料の保持者である。おが御土佐伯の、一世に近き歴史的な変遷をその身に付けていらつしやる。失礼ながらその御使在の今、私達はいろいろな機会をいただいてそのお話を伺つておきたいと思う。時には御迷惑なこともあるうかお定にお訪ね申しをり、集会に御出でを願つたりして、その御体験をお聞きしたい。

毎月やつてゐる現地研修にしても、これによいかといつても自問自答してゐる。今年には去年の秋まおつた因東半島に残りの部分を巡りたい。一と一と會員の声を耳にして、なるほどと思ふ。昨秋富貴寺や兩子寺を巡つたが、何と言おうか、因東は仏教文化の密林である。去年につづいてそのつづきを歩きたいと思う。又未踏の地日田も

敷いた。七が藩祖高政公の先封の地であり、中島子玉  
らが笈を賣うて留學し左広腹渡窓の私塾廣直園のある文  
教先進の地である。その外佐伯市内、周辺郡部でも本五  
村中野地などが殆んど残っているし、新しい会員の左めに  
は臼杵市にも行きたい、何と云つても歩いて見聞を廣め  
ることである。

ふるさとの移ろふもろいふるさとの  
かわらぬもろい ばしきふる里

これは三の丸の庭にある中根貞高先生（今は故人）の  
歌碑にある歌である。はしきは愛すべきという義である  
由、その故里が恐ろしい勢いで変りつつある。私共は今  
佐伯市はもとより、南海部郡全境へ勿論宇野所を念む  
——旧藩時代は岡藩に属してはいしたが、それ以前は佐伯  
氏の勢力圏内であつたやうだから——それを見学して  
久見浦以南へもと佐伯藩領——を郷土史研究の対象として  
いるが、今日に日に変貌しつつあるところもあれば、昔  
ながらの山々、川の流れ、麓山村の静かなる左すま  
いを見せているところもある。いずれにしてもはしきふる  
里である。毎日新聞、特に地方郷土紙には、その移り  
変わる郷土の姿が写真入りで報道されている。それは貴重  
な郷土の現代史の資料でもある。この資料に接する度に  
私共の足でたしかめる、歩いて学ぶことの、才だまたで  
あることを感ずること切である。

然し私共会員の勤めをもち、家業をもちている。仕事  
を放つて歩きまわるわけにはいきかぬ。ここになやみ  
がある。機会は何こうからやってくることもあるが、本  
会としては努めてその機会をつくり、会員多数が相携え  
て現地研究に歩きたいと思つてゐる。  
今年は一層の精進研究かなされるよう祈る也切である。  
(以上)

研究

毛利氏の女系について

会員 佐 脇 貴 一

(佐伯市津志河内)

佐伯藩祖毛利高政は尾張國愛知郡の人で、本姓は森氏  
父を北郎左衛門高次といふ友といふことば毛利氏家系に  
明らかなのであるが、いつ森氏とどういふ理由で毛利氏に改  
めたか不明かでない、伝承は中國毛利氏の人傳と有つて  
たため、輝元と義兄弟の約を結ぶ、その寸すめに従つて  
毛利氏に改めた（温故知新録・鶴藩政史・佐伯茶飯話）  
ことになつてゐるが、秀吉旗下の將士で森吉成・森勝持  
などが、いづれも毛利氏に改め、また黒田長政の家臣母  
里木兵衛がのち毛利祖馬と称したことを考へると、森、  
母里、守など「モリ」と讀む苗字の人々が、中國上州の  
大々名であつた大氏毛利氏にちよつかつて毛利と改称した  
のは、当時の武人の單純な考へ方から生じた慣例のよう  
である。

毛利高政の父は高次、やはり秀吉旗下の家士であつた。  
母は瀬尾氏、尾張海米郡の郷土瀬尾小太郎の女であつた  
といふ。鶴藩政史は高政の出生について

「或は豊國公の庶長子と伝ふ。初め豊國公徽なる時、  
瀬尾小太郎と親善なり。その女と与へ公を生む。因  
て備譯を賜りて高政と命名す。（當時豊國公木下藤吉  
郎高吉と稱す）女、後に森高次に嫁す。」

と伝へ、高政が秀吉の庶子であつたから、天正十五年六月  
の羽柴・毛利の和睦にさいし、高政、吉安の兄弟が毛利  
方へ人質に違つたのと、高政は毛利氏改姓の伏線に